

最優秀賞

埼玉大学経済学部斎藤ゼミ

地熱発伝

『行政情報』から『地域情報』へ  
郷土愛を育む広報紙づくり

市民自治の実現に必要なもの、それは住民一人一人の郷土愛であり、そのためには、地域情報の継続的な提供が必要であるとわたしたちは考えます。

地域情報とは、人や場所が特定できるリアリティーのある情報で、単なる行政のお知らせではない情報を言います。地域情報を提供するには、市民の89%が閲覧している広報紙を活用することが最も効果的です。

広報のほりべつは、市民が必要とすることを正確かつ迅速に知らしめることが大切であるとする方針から行政情報が中心の広報と言えます。実際に広報紙を調べてみると、行政情報が87%、地域の情報が13%と地域情報がとても少ないことが分かりました。

そこでわたしたちは、必要な行政情報を提供しつつ、地域情報を充実させ、郷土愛が深まる広報紙の作成基本方針を提言したいと思います。

この方針を実践していくため4つの具体案を考えました。1つ目に情報収集の強化です。地域情報を収集するため『ぬぶる・ペーパー』を配布する。これは、市民のエピソードや意見を提供してもらうためのもので、市民の声をピックアップしやすくするものです。募集方法は、広報紙に挟み込み配布し、スーパーや行政機関などの回収ボックスに入れてもらいます。『ぬぶる・ペーパー』によって、地域情報をもっと集まると思っています。

2つ目に評価体制の充実です。広報の評価基準を『郷土愛が深まるか』を基準にする評価とし、紙面改革の意思決定の場としてモニター会議を開催します。また、その成果を公表することで、市民にモニター制度が理解さ



れ、応募する市民も増えることが期待されます。

3つ目に行政情報の地域化です。記事の数が必須なら地域情報を増やした場合、行政情報が減ってしまうと考えてしまいますが、行政情報に日々のエピソードや意見を取り込み、郷土愛が深まる性質を持たせることで地域情報を増やすことができます。

4つ目にレイアウトの見直しです。『東奔西走』は地域情報であふれており、郷土愛を深めるために重要なコーナーであると考えられますが、市民の20%にしか読まれていません。原因は何なのでしょう。レイアウトが単調でメリハリがないためです。この解決手段として、優先順位に合わせて記事を大きくしたり、サイズを変えメリハリをつけることで、読者が増えると考えます。

これらの4つの効果を合わせることで、登別市の郷土愛の増加が実現されると考えました。広報紙を活用して地域情報を継続的に提供することで、郷土愛が深まり、市民自治の基盤が強化されます。わたしたちは地域情報を継続的に提供するというを発伝という言葉に、郷土愛を深めるということ、地熱という言葉に置き換えて、『地熱発伝』という4文字に思いを託し、提言の発表とします。

優秀賞

日本大学法学部外山ゼミナールA

『N.U計画』

～次の世代を育てる社会～

市民アンケート調査では、ほとんどの人が文化に関心を持っていると回答する一方、63%の人が文化に接する機会が少ないと感じています。この問題を踏まえ、わたしたちは文化活動への参加機会を作り出し、世代間交流の促進と財政面を配慮した、郷土かるたを提言します。

郷土かるたとは、地域の文化・伝統などを題材としたもので、自分が生まれ育った地域を知るツールとなるものです。かるたは、さまざまな人々が協力して作ります。予算を編成する市。授業に活用する小学校。子どもたちに指導するPTA。大会を実施する文化協会や文化・スポーツ振興財団。かるたの製作は、企業に協力をお願いします。そして、市民の方には、絵札や読み札のアイデアを募集します。これがわたしたちが考えた協働です。

文化や伝統を学ぶツールとしてかるたを用いると、遊びながら楽しく文化を学ぶことができますし、キウシト湿原をはじめとする世界に誇る自然もあるので、題材は文化や伝統にとどまらず地域



の魅力が再発見でき、お年寄りや子どもが、世代間交流をするきっかけになったり、練習や大会を通じて住民交流の促進を図ることができます。

さらに財政面では、企業の協力を得ることで、経費の大幅な削減が可能です。また、新設された『ふるさと納税制度』を財源として活用することも可能だと思います。

地元への愛着を深め、次代を担う子どもの育成や世代間交流の強化を目指し、郷土かるたを提言します。これがわたしたちが考える協働のまちづくりで、このことがネクストジェネレーションの創造につながります。

最後に『N. U計画』の由来についてですが、大学の頭文字を取ってという理由もありますが、登別市のNと人間愛や思いやりを意味する『ubuntu』のUです。つまり、郷土愛を育もうということです。